その日まで

JILL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その日まで

【Ｎコード】
Ｎ２６９８Ｙ

【作者名】
ＪＩＬＬ

【あらすじ】
「わたしはあなたにとってどんな存在なの？同じ年、同じ立場なら、私を見てくれるの？お願い私だけを見て…。」何気ない毎日を過ごしていた私に、突然やってきた恋。それは秘密の甘く苦しい恋だった。

第1話

ねぇ、あなたは誰を見ているの？
私じゃダメなの？私はあなたにとっては、コドモなの？
教えて…もっと近づきたいよ。

「おっはよーーー！！」

「おはよう。沙良。今日も元気ね～。ってまた、髪濡れてるじゃない。」

「だって、乾かす時間なかったんだもん。学校行くの間に合わないかと思って焦ったわ～。」

「はぁ…。そんなことなら夜にお風呂入りなさいよ。」

「うん、わかってるんだけど、つい朝になっちゃうのよね。でもお風呂入ったばかりだから、いい匂いよ～。男もこれで悩殺ね。どう…紫苑、嗅いでみる…？」

「ほぅほぅ。いい匂いだわぁ～。…って私を誘惑してどうする！男にでもしろっ！」

「あはは。いいね～ノリつっこみ！でも気になる人も、誘惑する彼氏もいないのよ。そうなったら、紫苑にするしかないじゃない？…あーもうチャイム鳴っちゃった～。それでは、今日も授業頑張りますかっ！」

いつもこうやって、紫苑と楽しく話をすることから私、沙良の朝は始まる。
私は人と話すのが好きだから、男の子も女の子も友達が多いけど、今は彼氏がいない。

もちろん高校に入ってから、好きな人は出来た。

1人目に好きになったのは、高校で初めて出来た、かっこいいオー

ラが出まくっている男友達。でもその人には、すぐに同じ学年の彼女が出来てしまった。ちなみに2年になった今でも付き合っていて、いつ見ても仲がいい。自分で言うのもなんだけど、その彼女より私のほうがずっと可愛いと思う。だから、二人が付き合ったと聞いたとき、すごくショックだった。けど、二人でいる雰囲気を見たら、すごく自然で、嫉妬は憧れに塗り替えられてしまった。

2人目に好きになったのは、同じクラスだった頭がよくて背の高いサッカー部の人。私が面白いことをすると、口を大きく開けて笑って、それが普段のクールな姿とギャップがあって惹かれてしまった。もう誰かにとられるのは嫌だったから、好きだと自覚してからは、たくさん話しかけて意識してもらうようにしたし、毎日可愛くして、気合いを入れて学校にも行った。でも、女の子にとっての戦いの日であるバレンタインデーに告白した私はあっさりと振られてしまった。振られた理由は、今は彼女がいらないからだと。それが本当かどうかはわからない。

恋は思っている以上に簡単にはいかない。
自分の好きな人が、自分を好きになってくれることは奇跡なんだと恋をしてから私は初めて知ったのだった。

そのまま時は過ぎ、今は高２の５月。好きな人がいないままでもいいような気もするが、やっぱり恋をする女の子は輝いているから、私も恋をしたいのだ。たとえ、片思いでもいいから。そんな思いを抱えて、変わり映えのない毎日を過ごしていた私は、片思いの痛みを全くわかっていなかった。

このときすぐ目の前にまで切ない恋が迫っていたというのに。

第2話

今日もこれからいつも通りのホームルームが始まる。担任から授業や行事に関する連絡を聞くのだが、これもまた退屈な時間である。

「おはよう、みんな。今日の連絡をする前に、うちのクラスの来た教育実習生を紹介したいと思う。」

いつもとは違った担任の言葉に反応して、おおーーー待ってました！！とか可愛い先生がいいな～。かっこいい先生がいいな～。などと言って、一斉にみんなが騒ぎ始めた。

教育実習生が来ることをすっかり忘れていた私は、あれそうだっけ？と隣の席にいる紫苑に話しかけた。

「そうだよ～。もう、沙良は興味ないことはすぐ忘れるんだから。でもどんな人かは気になるね。楽しい人がいいな私は。」

「どうせそんなに仲良くなることなんてないから、どうでもいいかな。去年の教育実習生とも仲良くならないまま終わったし、どんな人だったかも覚えてないくらいだもん。」

「沙良ってば、冷めすぎ。ちゃんと覚えててあげてよ。まぁそんな

んじゃ今年も、教育実習生とは仲良くならないのかもね？」

「おーい、みんな静かにしろ。それじゃ紹介出来ないだろうが。」

やっと静かになったクラスに、先生の声が響く。

「それじゃ、入って来て、川口君。」

「はい。失礼します。」

その声とともに、スーツを着た長身の男の人がドアを開けて入ってきた。

その姿を一斉に見つめたみんなは一瞬静かになったが、すぐに教室が再び騒がしくなった。

特に、女子がである。なぜなら、入ってきた人が顔の整ったかっこいい人であったからだ。さらさらの黒髪に、顔が小さく、目は切れ長で鼻は高いわけではないがすっとしていて唇が薄い。口角が上がっているのでクールながらも、嫌味のない顔立ちになっているのだと思う。

すぐに観察をした私は、とりあえずそれで満足して、みんなと騒ぐことはなかった。確かにかっこいいが、私は年上には興味がないし、

どうせすぐいなくなるのだ。そんな人に騒ぐほど、私は可愛い子ではない。

だから、その後に続いた川口先生の紹介もきちんと聞いてなかったし、顔もそれ以上見ていなかったので、川口先生の第一印象はかなり薄いものだった。どうせ関わることなんてないんだから、どうだっていいと思っていた。

そう思っていたのだ、このときまでは。

第3話

川口先生は数学担当だったので、今日から1ヶ月間は私のクラスに数学を教えている担任に代わって川口先生が教えることになった。

初めての授業で緊張しているのが丸わかりだったが、丁寧でなかなかわかりやすい授業だったと思う。問題を解く時間を設けて、先生は担任の外崎先生と教室を回って、わからないところを教えていた。とは言っても、私は近くの男友達にわからないところを教えていたのであまりきちんと見てはいなかったのだが。

私は定期試験で常に10位以内に入る成績で、特に数学は得意なので普段から教えることが多い。仲のいい男友達が普段から勉強をしないので、私をいつも頼ってくるのだ。人に教えることが嫌いではないし、教えることによってさらに理解が深まるので、私もいやいや教えているわけではない。

「あーーー！全然わかんねー。なぁ沙良これどうやってやんだよ？」

「ん…？ちょっと待ってね。……よし、出来た！！どこがわかんないって？」

「これだよこれ。これ微分したら次になにすりゃいいわけ？」

「あ～。それはね～…ここを…。」

私が教えようとした時、優しい声が上から聞こえた。

「どこかわからないところがあった？…うまく教えられなかったから、わからなかったよな。」

川口先生から声をかけられると思っていなかったので、私は少し驚いてしまった。

「あ…。えっと…大丈夫です。上手だったと思います。…教えるの。」

「そう？昨日たくさん練習したのに、本番では全然だめだな～と思ったから、そう言ってくれると嬉しいよ。」

そう笑って先生は、「川口先生～こっち来て教えてくださいよぉ。」と甘えた声を出した女子のところへ教えに行ってしまった。

これが川口先生と交わした初めての会話だった。

そして、最後に笑った顔がふんわりと柔らかくて私は思わず見惚れていた。年上の人が可愛く笑った顔というのは、素敵で……これがギャップなのか？と考え込んでしまった。

「おい、沙良ってば。早く教えてくれよ！すぐに妄想すんだからなー沙良は。」

「あっごめんごめん！！んで、そこはね…。」

再び現実に戻って私は教えることに集中し、そのまま数学の時間は終わったのだった。

しかし、このいつもと同じような時間も今日は少し違っていた。先生の笑顔が印象的で、私の心にしっかり焼き付いてしまったのだから。

第４話

「はい、ホームルーム終わり。明日もちゃんと学校来いよー。川口先生からは何か言いたいこととかある？」

「えぇっと…。今日は、ぼろぼろな授業ですみませんでした。外崎先生のようにわかりやすい授業が出来るように、頑張っていきたいと思います。あと、年はそんなに離れていないはずなので、気軽に話しかけてくださいね。」

その言葉にみんなが反応した。

「彼女はいるんですかー？」「アドレス教えて！！」「先生。年のこと気にしてんの？」などと、やかましく言いだしたのに、外崎先生が、呆れ気味に声を大きくして言った。

「そういうプライベートな質問はやめなさい。数学のこととか、大学のことを聞いたらいいだろう？まったく…。川口先生も、言いたくないことは言わなくていいからね。じゃ、みんな帰れよ。あ、今日の日直！！今日から日誌を見るのは川口先生だから、川口先生に日誌渡せよ。」

さぁ帰ろうと準備をしていた私は、そこで初めて日誌を書いてないことを思い出した。

「うわっ！日誌書いてないし！！どうしよ…。しかも川口先生に渡すのか…」

先生って、いつまでいるんだろう？私は日誌を丁寧に書くので、毎回３０分はかかってしまう。というか、教育実習生の人たちって、朝とか休み時間どこにいるの？

「沙良、途中まで一緒に帰ろう。」

「あ、紫苑。ごめん、日誌まだ書いてなくて…。」

「そっかー！わかった。じゃあ、また明日ね！！」

「うん、また明日。」

紫苑に断りを入れてから、私はとりあえず川口先生に話しかけることにした。

「あの、川口先生。私が今日の日直なんですけど…まだ日誌書いてなくて…。書いたらどこに持っていったらいいですか？それともす

ぐ帰っちゃいますか…？」

若干びくびくしていた私に川口先生は、笑顔で答えてくれた。

「あ、藤木さん…？だよね？放課後はバドミントン部に顔出すつもりだから、まだ学校にいるよ。」

私の苗字は藤木であるが、一日目で名前を呼ばれたことに驚いてしまった。

「え…？名前…。もしかして、みんなの名前覚えてるんですか？」

「うん。1週間前に外崎先生から、顔写真付きの名簿もらって、それでみんなの顔と名前覚えたんだ。まぁ…あってるかは自信ないけどね。」

「そうなんですか。私は人の顔すぐ忘れるので、十分すごいと思いますよ？話しかけられて、誰？っていうときが結構あるので…。」

「あはは、それはあんまりじゃない？」

「…そうなんですけどね。興味がないものは、どうしても…。って、

あ…。」

テンポよく会話をしている間に、いつの間にかみんな帰っていたようだった。川口先生は、思っているより気さくで話しやすいので会話に集中してしまっていた。

「これからすぐに書くので、先生はバドの方に行ってください。そっちに持っていくので。」

「あぁ。いいよ、大丈夫。趣味みたいなもんだから、すぐに行かなくても。ここで待ってるからさ、ゆっくり書いてよ。」

えぇ?!そう言われても目の前にいられちゃ緊張するって!!集中して書けないよ〜…黙っていられない、私の性格じゃ…。でも、そうは言えないし…。

「…わかりました。急いで書くので!」

「急がなくっていいよ。それとも俺ここにいちゃ書きにくい…?」

先生は苦笑いしながら困ったように言った。そんな顔に、どっか行ってくれ!!とは言うこともできず…。

「いえいえ！！全然大丈…夫(びゅ)です！！」

慌てて言ったため、噛んでしまった、恥ずかしい…。これはかなり恥ずかしい…。

「びゅ？！ふはっ！そんな急いで言わなくても…面白いなぁ～。とりあえず、ここにいてもいいということで、ありがとうね。」

「…はぃ。」

そういえば、バド部に行くって、先生バド部だったのかな？朝そんなこと言ってた？…私、本当話聞いてなかったんだな…でも、話やすくてよかった。日誌も話しながら書いていけばいいか。

先生の新たな一面に安心して、私は思わず笑顔になっていた。

第5話

「そういえば、藤木さんはなにかの部活に入ってるの？」

「あ、はい。華道部に入ってるんですけど、週1しかないので毎日暇なんですよ。」

「そうなんだ。なんか華道部って合ってるね。」

「見た目だけらしいですよ、合ってるのは。話し出すと、全然違うねってよく言われますし…。おしゃべりすぎるんでしょうね…。あと気が強いのも原因かも…。」

「そうなの？まぁ見た目だけで判断されるのも嫌か…。ごめんね、軽々しく言って。」

「いえいえ、気にしないでください。まぁ見た目だけでも褒められるのは嬉しいですしね。そんなに気にしてないんですよ。」

そうなのだ。私は見た目が大人っぽく綺麗だから物静かに見えてし

まうらしく、話すとおしゃべりで気が強い性格にみんな驚いてしまう。別にツンと澄ましてるつもりはないのに。でも、昔から言われすぎてそれにも慣れてしまった。ただ、最近じゃ、クラスの子に「沙良様」と呼ばれているのに戸惑いを隠せない…。なんでも、運転手のじいやがいるお嬢様に見えるらしく、勝手にお嬢様キャラにされてしまったのだ。他の人から見たらどう見えるのだろうか？なんだか、私がみんなに言わせてるように思われる気がする…。ますます気が強いキャラが固定されそうだ…。高飛車とか…。

「藤木さん…？どうした…？」

「あぅっ…すみません…ちょっとトリップしてました。」

「トリップ？！トリップってなに？」

「あっっとえっと…。妄想です……。すぐに考え事する癖があって…。」

「そんなに妄想してんの？！楽しそうだな～！藤木さんって天然のにおいがするもんなぁ。」

「天然？天然ではないですよ。ちょっと人とずれてるだけで…。」

「そうなの？でも面白くっていいね。一緒にいたら飽きなくて、いつも楽しそうだよ。」

先生は口を大きく開けて笑っていた。先生のその顔がすごく楽しそうで、まるで少年のようだった。私はドキドキしながら先生を見つめていたけど、笑い終わった先生と目が合うとどうしていいかわからなくなった。

「ん？笑ったから怒っちゃったかな…？」

「怒ってないですよ！！楽しそうだな～と見ていただけで…。」

そんな優しい顔で見ないでほしい…。綺麗な透き通った黒い瞳に見つめられると、わけもわからず胸の鼓動が速くなって、先生の顔を見ていられなくなる…。

「あ…あの！！日誌書き終わりました！」

「終わった？そうか…1時間も経ってたんだね。楽しかったからあっという間だったよ。」

「わ、私も楽しかったです。日誌にも先生のこと書いたんで、ちゃんと見てくださいね…？」

「うん、楽しみにしてるよ。今日はありがとう。…生徒と仲良くなれるかが心配だったんだけど、藤木さんと話したことでいろいろ安心できた。会話も普通に出来たし、年の差もそんなに気にならないって。明日からは、もっとみんなと仲良くなれたらいいな。」

「仲良くなれますよ！うちのクラスは、みんな明るくて面白い人たちばかりなので、すぐに仲良くなれると思います。年の差だって5歳なら、全然大丈夫ですよ！」

「そう言ってもらえると心強いな。ありがとう。さあ、帰ろうか。」

先生と４階の教室から出て、歩きながら話していたらもう１階だった。

「部活頑張ってくださいね。…今日は先生と話せて楽しかったです。」

「うん、楽しんでくるよ。それじゃあ、また明日ね。気をつけて。」

「はい、さようなら。」

そのまま先生は体育館の方へ向かって行った。

私は先生の後姿をしばらく見ていたが、はっとして下駄箱の方へ歩きだした。

なんで私先生のこと見てたんだろう。無意識で見てたよね…？

…きっと、先生と思ってもみなかった接触に自分でも驚いてるだけ

なんだ。

でも本当は…。

もっと話したいって思ったんだ。
先生に見つめられたとき。

第6話

昨日は家に帰った後、先生の笑った顔が何回も浮かんできてなんともいえない気持ちになった。ぼ～っとしてた時間が結構あって、お母さんにどうしたの？具合悪い？と聞かれてしまったほどだ。…自分の気持ちを素直に言うこともできず、なんでもないとごまかしたのだが。

そんなわけで少しもんもんとした気持ちを抱えて今日は学校へ来た。

「あっおはよ～沙良。…ん？なんか今日テンション低くない？」

「おはよ。そうでもないよ。考え事してたから、ちょっとぼ～っとしてたのかも…。」

私の長所は、いつも明るいところなんだ。このもやもやをこれ以上考えたって何も変わらないんだから考えるのはよそう。…必要になったら、わかるよね。

「そう？大丈夫？」

「うん！もう大丈夫！！考えるのやめた！」

「えー?!切り替え早いなぁー!!…でも、私に言えることだったら、相談してよね?」

「ありがと!!自分が考えてることがまとまったらちゃんと言うね。」

紫苑には悩んでいることがあったらいつも相談して話を聞いてもらっている。私の気持ちを否定せず、最後まで話を聞いたうえで自分の意見を言ってくれるから、すごくためになるし安心するんだ。

ホームルーム近くになって、教室にみんな集まってきた。「おはようございまーす!!川口先生!!」という声が聞こえて、ついドアの方を向いたら川口先生が教室に入ってくるところだった。

先生は笑顔であいさつしている。心なしか昨日よりリラックスしてるようだ。私も昨日はたくさん話したんだし、あいさつしようかなと思っていると先生と目が合った。そのまま先生はこっちに向かってきて、私に話かけた。

「おはよう、藤木さん。」

「っ…!お、おはようございます!」

「ん…なんか緊張してる？俺は、今日は昨日よりほっとしてるよ。藤木さんのおかげかな？」

「び、びっくりしただけです！緊張してるわけでは…。今日はみんなと仲良くなれるといいですね。」

「うん、今日は体育の時間にも顔出そうと思ってるんだ。体育の教育実習生に誘われたから。一緒に出来たらいいなと思って。」

「そうなんですか？「って、いつの間に先生と沙良仲良くなってるの？！」」

私と先生が話しているのに紫苑は驚いたようだ。確かに昨日の今日で仲良くなっていたら不思議に思うかもしれない。

「あ～。昨日ね、日誌書けなかったじゃない？先生が日誌書き終わるの待っててくれて、その間にたくさん話したんだ。そうですよね、先生。」

「うん。昨日は藤木さんが面白くて、たくさん話したんだ。佐藤さんもこれからよろしくね。」

「そうなんですかー！昨日は先生に興味なかった沙良が、今日は普通に話してたからびっくりしましたよー！私は先生に興味あるので、よろしくお願いしますね！！」

「興味ないって、さすがに寂しいな。昨日、藤木さんと仲良くなれたと思ったのは俺の勘違いなのかな？」

そう言って先生は、少し意地悪そうな顔をして私を見た。

「今は違いますよ！！興味ありまくりです！昨日楽しかったし…ってもう、あ〝ぁー！！」

紫苑の発言に私は焦っていた。本当のことを言わなくてもいいのに！と。先生も今は私の気持ちが違うってわかっててこんなこと言うし…。

「あはは！！そんなに焦らなくてもっ…！！ふはっ。藤木さん一生懸命に言うんだもんな〜！！おもしろすぎるよ。」

「ふふ、沙良ってば発狂してるじゃない。まぁ、先生にわかってもらえてよかったね？」

よくない。よくないよ…。私のこと二人とも面白がって。でも…

「もうバカにしてーーー！！」

そう言って私も結局笑ってしまった。やっぱり楽しいのは好きだ。みんなが笑ってくれるのも。

昨日はいろいろ考えたけど、楽しいことや嬉しいことは素直に受け止めていけばいいんだ。わからないことは少しずつわかっていくはずだから。

今は、先生ともっと仲良くなりたいって思っている自分を受け止めてあげよう。

第7話

「はぁ…体育めんどくさいなぁ～。球技とか本当苦手なのに、ソフトボールなんて…出来るわけないよー！！」

「やれば楽しいって！それに今日は、キャッチボールだけだから大丈夫だよ。あ…沙良ってば、今日の体育に川口先生来るから気にしてるんだ？」

「は…？いやいやいや、違うって！！違うってば違うよ！！普通に運動が嫌いなだけだから！…なんで先生がそこで出てくるのさ…。」

「まぁ～あ、認めないならそれでいいけどさ。…先生と沙良の今朝の雰囲気よかったからちょっと気になったんだよね。でもいいと思うよ年上。沙良はちょっと冷めてる部分もあるから、年上のほうがしっくりくる。」

「確かに年上は嫌いじゃないよ…。でも先生のことはそういう風に見てるわけじゃないし…。」

「そっか。…私からはこれ以上聞かないことにするよ。じゃ、外行こうか！」

紫苑には気を遣わせてしまった。
きっといつもと違う私に気が付いたんだろう…。

「うん！ちゃんと紫苑のとこまでボール飛ぶといいなぁ。」

先生は体育に来るって言ってたけど、見るだけなのかな？
みんなと混じってやったら楽しいと思うんだけど…。

嫌いな体育が今だけはちょっと楽しみなんだ。
だって、今ある時間は1回しかないんだから。

第8話

「集合！…はい、みんな今日から教育実習生の高橋先生が一緒に教えてくれます。それでは、高橋先生から一言どうぞ。」

体育の中島先生は2組に配属になった体育担当の高橋先生を紹介した。私たちは隣のクラスだったので、高橋先生を何度か見かけていた。高橋先生は笑顔が可愛い元気な男の先生でそれなりに生徒たちも騒いでいたのだ。…まぁ、川口先生ほどではないが。

「はい、高橋俊と言います。今日から3週間お世話になるのでみんなよろしく！気軽に声かけてくださいね。」

にこにこと人好きするような笑顔で明るく自己紹介をする高橋先生を見て私は、少し馬鹿そうだなと思ってしまった。犬のようだというか、なんにも考えてなさそうなのだ。そんな失礼なことを考えていると川口先生がグラウンドに向かっているのが見えた。

黒のジャージを着た川口先生は思ったよりジャージが似合っていてかっこよかった。背が高いからなんでも着こなしてしまうんだろうな…。

「あ、川口先生が来ましたね。今日は川口先生も一緒に体育してくれるそうですよ。」

「はい、俺が誘ったんですよ。みんなもそうした方が早く仲良くなれるかなと思って。」

「では、川口先生からも一言どうぞ。」

「えーっと…。今日は高橋先生が誘ってくれたので、参加することにしました。最初は見学のつもりだったんですが、一緒に体を動かしたいなと思ってジャージ着て気合い入れました。」

少し恥ずかしそうに話す川口先生を見て、思わず笑ってしまった。…だって、すごく可愛いから。気合い入れて、って言っているのに、気合い入れた話し方じゃないし。

「なに沙良ってばにやにやしているのよ？」

「だって…。可愛いじゃない？インテリ風なのに、気合い。って…。」

「まぁ、たしかにね。…あ、ペアになってキャッチボールしろだってよ。…私とじゃなくて、川口先生と沙良はする？私より仲良さそうだったし。」

「ちょっとー！！紫苑てばすねないでよー！！私は紫苑としたいんだって！！」

たまにこうやって紫苑は私を突き放して面白がる。紫苑は真のＳだと思うんだけど、本人は否定してくる…。嘘ばっかりだ…。

「っぷ。…沙良はいじりがいがあるなぁ～！沙良の方が川口先生よりずっと可愛いよ？」

「…ん　。知らん！！ほらーーー！！」

適当なことを言う紫苑を無視して、私は思いっきりボールを投げた。このもやもやを吹き飛ばすように。

第9話

「あ、川口先生と高橋先生がキャッチボールしてるよ。楽しそうだな〜。なんか、ああいうの見ると年上っていうのを忘れそうだわ。…やっぱ男って、どっか子供なんだろうな。」

二人を見ると笑いながらキャッチボールをしていた。私たちの高校に教育実習生として来るのは、卒業生と決まっているので、二人はつまり同級生なのだ。たとえ話したことがなかったとしても、打ち解けるのも早いかもしれない。

「楽しそうだね。って、紫苑の言葉にはいろいろ詰まってそうだね。今までの経験が…。」

「まぁね…。幅広く付き合ってきましたから。ある程度は把握しているつもり…。沙良ちゃんは、こんな風にならないでね〜！！汚れちゃだめよー！！」

「いや…私もそこまでキレイではないよ。それなりにお腹の中も真っ黒だったりするし？」

「「…ぷっ！」」

なんだか冷めた会話に笑ってしまった。こんな感じの雰囲気も紫苑と合うから、自然な私でいられるのだ。一緒にいる人はやっぱり私が自然体でいられる人じゃないと…。———その点、川口先生とはすぐに打ち解けられたな。話している時も普通だったし…。やっぱり年上の人だから…？

ん…？なんか足に当たったんだけど…。

ふと下を見るとボールが転がっていた。

「藤木さん大丈夫？！」

「え…？あ、これって先生のボールですか？」

「うん、で大丈夫？！当たったりしてない？！」

先生はすごくあわてていた。なんで？と思ったが、きっと頭にでも当たったと思っているんだろう。

「そんなにあわてなくても大丈夫ですよ！！足元に来ただけですから。」

安心してほしくて、笑顔で言うと先生は、ほっとした顔をした。

「よかったよ…。女の子に当てたりでもしたと思うと…「当てたりでもしたと思うとなんですか？責任でも取ってくれるんですか？」」

「なに言ってんのよ紫苑！！先生困ってるじゃない！！責任とか…。すみません、紫苑ってば…。」

「いや…、いいんだけどね。佐藤さんは、食い込んでくるね…。」

「え～？そんなことないですよ？普通に疑問ぶつけただけなんですけどね？」

さっきも思ったけど、やっぱり紫苑はＳだ。…というか、ドＳだろ。川口先生もたじたじじゃない…。

…でも先生の困った顔も可愛いかったから紫苑の行動も悪いことばかりじゃないかもしれない。

それに先生のいろんな表情を見てみたいって思っていたから。

第１０話

「そういえば、川口先生は高橋先生とずいぶん仲よさそうですね？」

私が少し気になっていたことを紫苑は聞いてくれた。紫苑からすれば、たいして気にもなっていないことかもしれないが。

「あぁ。あいつとは…って、高橋先生とは２．３年同じクラスだったからね。顔見知りなんだよ。言うほど仲良くは…」

「あいつって…思ったより仲いいんですね。」

同じクラスだったんだ…。その割に仲いいというのを認めたくなさそうだけど…。

「川口せんせーい！！早く戻ってきてくださいよ！！」

「あ、はい！…それじゃあ、俺は戻るね。」

「どうぞ、仲良く二人でやってくださいねー！！」

「いや、だから…。あ、藤木さん佐藤さんのとこまでボール飛ぶといいね。細い分力が足りないのかな？」

「え？！見て…？！って先生言い逃げですかー！！」

先生はどうやら私たちを見ていたようだ。いつの間に見ていたんだろう…。

…恥ずかしいから見ないでほしかったのに。

「なんで見てるんですかー！！」

そう言ったときに思わず顔がゆるんでしまったのは仕方がないと思う。

だって、私を見ていてくれたなんて。

やっぱり嬉しいと思ってしまうよ。…先生。

第１１話

先生が来てから1週間がたち、休日をはさんだ今日は月曜日だ。

先週は新しいことだらけで気持ちがふわふわしていたせいか、土日はほとんど寝てすごしてしまった。だらだらして過ごすと時間がたつのが早いと思う。―――もう、３時？今日もほとんど終わりだなぁ。なんもしてないよ…。なんて気持ちになってしまう。

でも今日からまた先生に会えるので気分は上昇だ。
嬉しくて、大好きな歌を口ずさみながら校内に入って階段を上がっていると下から声をかけられた。

「おはよう、藤木さん。朝からご機嫌だね？なにかいいことでもあったのかな？」

振り向く前に誰かなんて声でわかる。
というか、歌ってたの聞こえちゃった…？歌ってるのを聞かれるのって結構恥ずかしいんだよね。…やめられないけど。

「おはようございます先生。なにもないんですけど、学校に来たらなんか楽しくなっちゃいました。」

「歌まで歌っていたから、なにかあったんだなぁ～と思ったんだ。気になってね？」

「…？！やっぱり聞こえてましたか…。はぁぁぁ。……というか、聞こえても普通知らないふりしません？先生って結構いじわるですよね。」

―――えぇ？！そんなことないよ？優しいと思うんだけどな？素直って言われるし。

先生はいたずらっこのような顔をして言うけど、そんな顔で言ったって説得力ないでしょ…。それでも様になってるのが少しむかっとするけど。

先週は結局毎日先生と話をしていた気がする。それはお昼であったり放課後であったり様々だったけど。その間に先生は他の子とも仲良くなり、クラスの子に「悠理」と下の名前で呼ばれるようにまでなった。下の名前を呼び捨てで呼んでいるのを聞いた担任は怒ったが、川口先生が「気にしてないので大丈夫ですよ。それに私は教育実習生ですしね。」と言ったこともあり、女の子の川口先生に対する呼び方は変わっていない。

―「悠理」という声が聞こえるたびに、もやっとしたものが心の中にうまれてしまう…。他の子が名前で呼ぶのをうらやましく思う反面、一度呼んでしまったら距離感がわからなくなりそうで怖いから

名前では呼びたくないんだ…。だって名前ってやっぱり特別なものだと思うから…。

先生と過ごす時間はすごく楽しくてドキドキする。
年上の人の包容力があって、うんうん。って笑顔で私の話を先生は聞いてくれる。先生の話してくれることも新鮮で私を飽きさせないでくれるから、自分本位の同じ年の男の子との違いを感じてしまうほど…。

先生と目が合うたびに変な感じになって、いつもの私ではいられなくなる。
話すときは自然体でいられるんだけど、見つめられてるって思ったら心が騒ぎだす。

先生はずるいと思う。
こんな風に女の子を惹きつけてしまうんだから…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2698y/

その日まで

2011年12月17日19時50分発行